

大東ふれふれ帳

(1)

ふるさととめて 花いちもんめ

ちょっと気取って、着飾ったお母さんが行き交う入学式の季節、もうすぐ春。

やがて上級生に引率されたかわいい小学一年生の登校する列が、町なかに目立ち始めると、飯盛山に春霞がたなびき、淡い日ざしが人びとの心をなごませる。

濃い緑色の山肌にところどころ白く、あるいはうす紅色のまん暮を張ったように桜がほころび始めると、市内の桜が一斉に花開く。来春、市制三十年を迎えるこの町も、人口十二万を

超え都市化の進むなかに、際立って美しさを競う桜、旧南郷中学校跡の十数本の古木、住道中学、住道南小学校の堀割沿いの桜並木老・若、さまざまの、百本

あまりが咲きにおう。

東の山辺に近く、広大な関電中垣内変電所を挟む古堤街道と、阪奈道路下り線の二筋の道沿いの桜並木、

満開どきは、豪華けんらん百三十本を超える花木に圧倒され、声をも曇勝である。

いずれも今は、激しく流れ行く車の波に、花の色、香をたづねてそぞろ歩きを樂しむ人の姿もまばら、流れる車の窓から信号待ちの数秒、つかの間のあわたたしい花見ゾーンである。静けさと、緑と、花を訪ねて、飯盛の山路をたどる、整備された絵日傘ハイキングコースをはずれ、遠く物寂びた山中にカリッラワーのように盛りあがっ

た桜、手の届かぬ高根の花とはこの事をいうのであるうか。

戦国期の古城、飯盛城跡も、いまは市民の憩の場。山頂、尾根一帯に近年植えられた桜が、豊かに花をつ

け、古歌に『……朝日に、日傘の舞』と、大東慕情におう山ざくら花』と歌われた姿をほうふつとさせに散る花びら、そのしじまを破るほん鐘の音。

落花さかなころ、野崎新池の池面に散り敷き、そよ風にゆらぐ花びら、向こう岸の雑木林と竹林の緑が、この情景を美しく映えさせ短かい、行く春を惜む。自然の演出に惹かれる花の季節の山路である。

(文 今村安和)



桜の名所「野崎観音」は、多くの花見客でにぎわいます